

浄土

6
1994

想い出づくり

住吉俊彦

旅

夏 攸吾

好評連載

吉川英明 利根川 裕 稲葉小太郎

連載講話

高橋富雄

平成の「自然葬」

伊藤唯真



法然上人鑽仰会発行

は
じ
め
に
押
し
て
ね、
0
0
8
8。



ゼロゼロ押したら ハッピー ハッピー

0088

日本を楽しくする電話

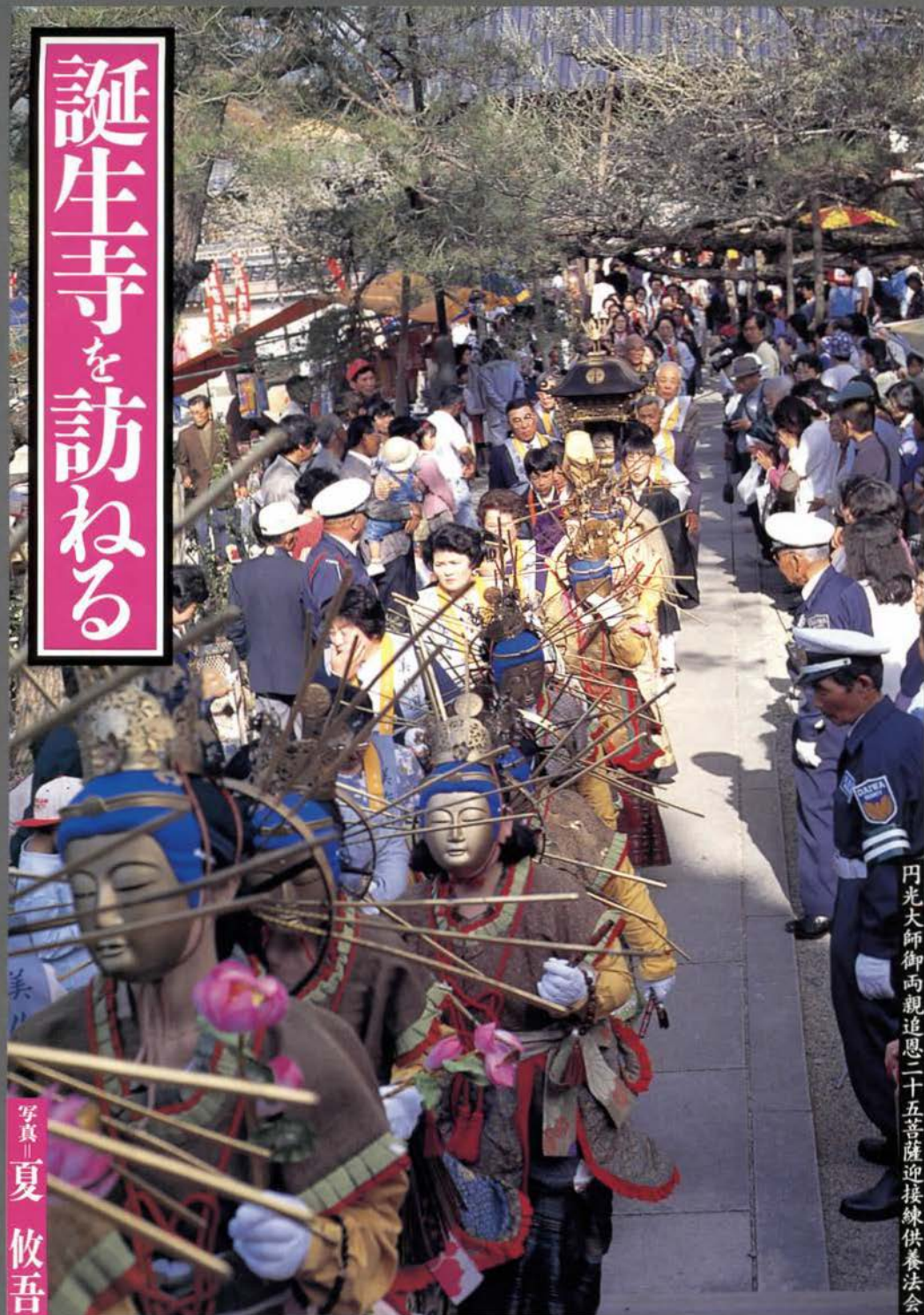
お申し込み・お問い合わせはお客センターへどうぞ。

☎0088-82 (無料) / ☎0120-0088-82 (無料)

■受付時間 9:00~23:00 (年中無休)

0088なら●月々の基本料金は一切かかりません。こ使用になった通話料金
だけのお支払いです。●かけ方は簡単。現在お使いの電話機で、市外局番
の前に"0088"を押すだけ。●60kmを超える市外電話は0088がおトク。

誕生寺を訪ねる



円光大師御両親追恩二十五菩薩迎接練供養法会

写真 夏 攸吾



誕生寺本堂(御影堂)、練供養の日は不思議と好天に恵まれる



出番を待つお稚児さんたち



菩薩になりきろうとする信者たち



誕生寺浄土院

浄土門主御代理大師師、小笠原恵信上人による本堂での回向法要



参道にある婆娑堂、練供養は本堂と三ことの間を往復する



浄土



1994/6月号

目次

[カラー口絵]誕生寺を訪ねる……………写真=夏 攸吾	3
思い出づくり……………住吉俊彦	8
誕生寺の練供養……………夏 攸吾	16
午後の日差しの中で——⑥	
消え行く言葉……………吉川英明	24
利根川 裕のマイアングル——⑩	
教師歴三十数年……………利根川 裕	32
現代の快僧——その5	
超宗派仏教を目ざす“裏方”和尚……稲葉小太郎	38
念仏信仰と武士道(四)……………高橋富雄	52
平成の「自然葬」……………伊藤唯眞	60
編集後記……………	70

表紙題字=浄土門主 中村康隆貌下

表紙撮影=夏 攸吾

目次・編集後記イラストレーション=田村直巳

想い出づくり



住吉俊彦

写真 落合泰三

がん告知

胃がんの手術をしてから、もうすぐ一年が巡ってくる。今から考えると、がん細胞の早期発見は、まさに「運が良かった」としか言いようがない。そして、その運の良さに加えて、入院、手術、術後のリハビリテーションという生まれて初めての体験が、五十歳を迎えようとしてい

たわたしに願ってもない新しい転機を授けてくれた。

がんの早期発見は定期検診にあり、と言う。

自由業のわたしは、毎年、市が実施するがん検診を受けている。昨年の春も受診した。

いつもなら「異常なし」と書いた無愛想な葉書が届くだけだが、今回は封書だった。開封すると、「要・精検」と書いた紙と、糊づけされた封書が出てきた。「精密検査に行った病院で

渡してください」とある。わたしの脳裏に、一瞬だが不吉な予感が走った。が、まさか胃がんなんてと氣をとり直し、近くの病院に精密検査の予約を取った。

X線検査の結果、潰瘍と診断された。数日後に行なわれた内視鏡検査では、「潰瘍が各所にある。放っておいたら間違いなくがんになる。早く切らないといけない」との緊迫した診断となった。よく小説などで「頭の中がパーッと白くなる」というフレーズにお目にかかるが、このときのわたしはまさにそれを実感した。

しかも奇妙なことに、タバコを吸いたいという喫煙嗜好回路が、バシヤツといった感じで切れた。学生時代から数えて三十有余年も吸いつづけ、最近でこそ一日に四十本から六十本に押さえ、折にふれて禁煙に挑んでは失敗してきていたのに、「放っておいたら間違いなくがんになる」の一言が、喫煙意欲を完全に封じ込めて

しまったのだ。

いつ入院するかと催促されたが、動転したわたしには決断がつかない。締切り間近の原稿や、すでに取材に入っている仕事も抱えていた。結局、生検（採取した疑わしい細胞を検査する）の結果を待つて判断することにした。この段階でもなお「がんになんかなるはずがない」「潰瘍といっても悪性じゃないかもしれない」との強い期待感をもっていた。

一週間後、生検の結果が出た。担当の外科医は「疑わしい細胞を十三コ採取したが、その中からがんと確実に診断される細胞が発見された」と言った。

X線検査では「潰瘍」、内視鏡の検査では「がんになる可能性の高い潰瘍」、そして、生検の結果は「真正正銘のがん」……いつのまにかわたしはがん告知への道筋を歩んでいた。面と向かって「がん」と告知されたときは、一瞬だが思

考が停止した。が、内視鏡検査での所見時ほどのショックはなかった。

「わたしのは早期がんだ。手術さえすれば助かる」そう自分に言い聞かせていた。

がんのシグナル

事前に何か変化はなかったか？　がんの兆候は？——わたしが胃がんだと言うと、身内や友人たちは必ずそんな質問を向けてくる。がんの入門書などを読むと、早期のがんではこれといった兆候はほとんどないそうだが、わたしの場合は、あった。

いじめにであった子供が母親に「助けてほしい」と合図を送るがごとく、わたしのからだも「がんだよ」とシグナルを送っていた。

たとえば、夏から秋にかけて体重が四、五キロ落ちた。鳩尾みぞおちのあたりが冷たい感じで、酒を

飲めばすぐに吐き気に襲われたり、下痢症状に陥った。食後数時間後には必ず胃のあたりに不快感が押し寄せ、食欲が減退した。

頭の片隅では「ひよつとしたら」との思いもなくはなかったが、夏バテによる体調不全との自己診断のほうが勝った。わたしは断続的に送られてくるシグナルを正確にキャッチできなかった。いや、しようとしなかった。その当時はまだ、がんと向きあう勇氣はなかった。

余談になるが、体重の落ちはじめた秋口、わたしは胃がんの定期検診を受ける手筈を整えていた。ところが間の悪いことに、長年つきあっている痔と些細なことで仲違いした。X線検査のときに飲むバリウムは痔に悪い。わたしは定期検診をキャンセルした。

もしこのときX線検査を受けていたらどうなっていただろうか。

シロウトのあと講釈だからほんとのところは

わからないが、早期も早期で、がん細胞は発見されなかったかもしれない。そして、異常なしと書いた葉書が届き、体調不全は夏バテのせいだと思ひ込んでいることもあって、たぶん翌年春の定期検診は受けなかっただろう。そうなること、その年の秋頃には進行がんへと移っていたことも考えられる。

事実、手術後に判明したことだが、わたしががん細胞は稀に見る悪相で、ひとたび胃壁を突き破ると、あちこちに転移する性質をもっていたようだ。それを考えると、確かにがんのシグナルは見逃しはしたが、運の良さで救われたと感謝の思いである。

胃亜全摘術

診断書を見ると、手術名として「胃亜全摘術」と書かれている。つまり胃のはとんどを摘出し

たというわけだ（正確には四分の三摘出）。手術は昨年七月六日だった。

その前日の夕刻、執刀医のA先生から手術に関する詳しい説明を受けた。インフォームドコンセント（医師による詳細な説明と患者の同意）がやかましく取り沙汰される昨今だが、A先生のそれは図解を交えて微に入り細に及ぶ。それだけでも信頼に足る先生だと判断できる。

その説明の折、がんの進行の有無や程度は開腹してみないとわからない、術後の病理検索で予後（病後の経過に関する医学上の見通し）が決まる、場合によっては抗がん剤のお世話になるかもしれない、などと率直に語ってもらった。

もつとも、これまでの検査結果から、わたしのは早期がんだと勝手に思い込んでいた。しかし詳細な説明を聞いている内に、ひよっとしたら進行がんの可能性も、などと疑心が芽生えてきて、突然、からの深奥から突き上げるよう

な震えが襲ってきた。

手術当日は、不安と期待、強気と弱気とが複雑に入り交り、身の内は緊張感と厳肅な思いとでピンと張りつめていた。刻一刻と予定された手術の時間が迫る。ストレッチャーに乗せられたわたしのからだが小刻みに震え出した。肩に前麻酔の筋肉注射が打たれた。気持ちがほんの少し楽になった。

時間がきた。病棟担当の看護婦さんに押されて病室を出る。エレベーターに乗り、手術室のある階に到着した。看護婦さんが交代する。わたしに顔を近づけると微笑んだ。

「今日の手術中ずっとお世話をします看護婦の○○です」

名前までは覚えられなかった。ストレッチャーから手術台に移された。あれこれ考える暇もなく脊髄に麻酔注射が打たれた。A先生が「気分はどうですか」と声を掛ける。わたしが、冗

談とも本気ともつかない声で、

「殺さないでください」

と言うと、

「山賊じゃないから、命まで取ろうなんて言わないですよ」

A先生はそう言って笑った。

覚えているのはそこまでだった。数をかぞえてくださいとの麻酔医の言葉に従って一、二、三、四……とかぞえている内にスツと無の状態に落ち込んでしまった。

手術の時間は、当初予定の三時間から三十分ほど余計にかかったという。胃が普通の人より大きかったからだと言明された。手術は輸血の要なしに無事終了した。わたしは自分の病室のある四階のナースステーション前の部屋に運ばれた。そこでいったん麻酔から醒めたが、身内と二言三言交わすと再び深い眠りに落ちた。つぎに気がつくと朝だった。頭の中は混沌としていた。

屋上で祈る

看護婦さんに励まされるようにしてベッドから起き上がると、自分の病室まで歩いて戻った。手術の翌朝にはもう起き上がって歩いたと言うと、みんな驚くが、それはこの病院が取り入れている「七十二時間脊髓麻酔」のせいである。この麻酔注射のおかげで、手術後の痛みは皆無だった。

それにしても、奇妙な格好だった。点滴姿はやむを得ないとしても、鼻孔から垂れ下がった胃管が鬱陶しかった。しかしこの管は、一日約一・五リットルも分泌される胃液を対外に排出して、胃と腸の縫合部を守る重要な役目を負っていた。

縫合が無事かどうかのX線検査は、手術から約一週間後に行なわれる。わたしは胃管が取り

除かれる日を楽しみにして、毎日リハビリに励んだ。

入院生活を送っていて最も恐いのは、足腰の衰えだ。わたしは朝五時過ぎに目覚めると、点滴袋をぶら下げて病棟を散歩した。少し元気があると、屋上に出て、早朝の新鮮な空気と緑を満喫する。そんなとき、思わず知らず涙があふれ、自分は生かされているのだとハラの底から実感し、感謝の気持ちを新たにした。その後、天気の良い朝は屋上に足を向けるのが日課となった。

元気な内は精一杯生きてきたと自負していたが、入院して、改めてわが半生をふり返ると、「ウカウカと生きて五十年」などと自省することしきりだった。これからは、大地をしつかり踏みしめて、真面目に、真剣に、楽しく、悔いのない人生を送りたい——わたしは天に向かってそう誓った。

術後六日目、縫合検査が行なわれた。万事うまくいっているとかで、一気に管が抜かれた。鎖を解かれた感じだった。気分がウキウキして、病棟担当の看護婦さんに「やっと取れたよ」と吹聴してまわった。翌日からは点滴だけの生活にオサラバして、三度三度流動食がいただけるようになった。

だが、喜びもつかの間、縫合部のX線検査で強烈な下剤が挿入されていたため、翌日の夜半から猛烈な下痢に襲われた。寝る暇などなくベッドとトイレを往復する始末。かくてわたしの頬はゲツソリと痩せこけ、胸部の張りも失せてアバラが浮くようになった。まさに「骨皮筋右衛門」だった。

福祉を生きる

病理検査の結果は、吉と出た。

A先生は「がん細胞としては悪相で、タチが悪い。ほんとなら胃壁を突き破って、他に転移していてもおかしくなかった。ところが粘膜下層内にとどまっている。まさに運が良かった。おめでとう」と破顔一笑した。その言葉を聞きながら、自分は間違いない助かったのだと涙をこぼしそうになった。

抗がん剤のお世話になることもなく、正味二十六日間入院生活に別れを告げた。すべてにわたって幸運だった。

病を得ると人生観が変わると言う。わたしの場合も然りである。入院中に考えていたのは高齢者の福祉の問題だ。退院したら福祉の問題を専門にやりたいと決めていた。元気な頃には想像だになかったテーマである。

たまたま四階の病棟にはからだに障害をもつお年寄りが大勢入院していた。車いすで廊下を移動する人、看護婦さんの叱咤激励を受けなが

ら歩行訓練する人、わたし以上の骨と皮の姿で介護入浴からあがってくる人……そうしたお年寄りを病棟散歩の折々に目のあたりにした。そしてその都度、できることがあればお手伝いをしたいと思った。

退院後しばらくは社会復帰に向けてのリハビリに専念した。なにしろ五百メートルを歩くのに息切れするのだ。食事の量もわずかで、それを一日六回に分けて食べる。体力、体力を取り戻すのに時間が必要だった。

その一方、高齢者の福祉に関する書物を購入し、少しずつ読み進めていった。一ヶ月もすると、電車に乗って都心へ行けるほど回復した。高齢者福祉のシンポジウムや、勉強会には積極的に参加した。高齢者福祉の状況どうか、医療、介護の問題はどうなっているのか、まさに初歩からの勉強であり、それはいまなお続いている。

縁があつて、これから発足しようとしていた所沢YMCAの高齢者福祉ボランティアグループの一員に加えてもらった。また、ライターとしての自分のキャリアを生かして、地域で築く福祉・医療・介護の月刊記録誌『ちいきレポーター』を独自に創刊した。

口はばつたい言い方になるが、入院中に思ったのは、人生とはひょっとしたら人生の最期の瞬間に向けての想い出づくりではないかということだ。終幕を迎えたとき、楽しく、懐かしく、気分がしあわせになる想い出をどれほど脳裏に描き出せるか、豊かな最期はその豊かな想い出によって決まるのではないか。わたしはあとどれほど生かしてもらえるかわからないが、しっかりと眼を見開き、大地を踏みしめ、たくさんの方の良き想い出を築いていこうと願っている。

（フリーランスライター）



誕生寺の練供養

文と写真——夏 攸吾

菩薩の心境を体感する

撞鐘^{どうしやう}おごそかに鳴りわたり、境内に和讃^{わさん}の聲が流れて満ちた。午後三時、春のやわらかな陽を浴びて、参道の両側いっぱい集まった人々の注目は正面、一段と高い本堂。回廊に居並んだ二十五菩薩^{にじふご}が、順に、ゆるゆると、階段に架設されたスロープを降りてくる。

境内に観衆のざわめきが広がる……。

誕生寺の練供養会式が始まった。

その模様を観にきた私^{わたし}、このたびは本誌特派だ。緊張を感じながらも、大好きなまつりの興奮に出逢えて、少しほっとする。

緊張したのは、かしこまったことは苦手だからで、サービスピ精神を発揮しにくい。それに、今回のテーマは本誌

読者のほうがよくご存じだろう。そう考えると弱ったけれど、わが「法然さん」の「おまつり」ではないかと思えば、ほっと救われる。いつもの自然休でいこうと腹をくくれた。



私は、中学・高校の六年間を法然さんの学校に学んだ。大本山増上寺の、芝学園。正直いつてなんじやわけのわからん生徒、ながらも門前の小僧なんとやらで、気がつくとも浄土門の開祖上人「法然さん」が親しく精神（こころ）のうちに在った。そうしてこれは、日ごろの生活ぶりとは別に、卒業同窓生の多くが認めるところ。そんな校風だった……。

練供養の行列が近づいてくる。

先導と供奉の僧侶や天童稚児らに守られ、黄金の面の二十五菩薩が静々と参道を歩む。その身体に触れようと熱心な信者が手をさしのべ、勢いあまって菩薩さんをたじろがせたりする。山門のすぐ内側、法然上人が叡山へ旅立

練供養の朝 津山線誕生寺
駅（右）にぎわう誕生寺門
前の参道



ちの記念樹という、大きく枝を張る公孫樹ちようすうの古木の下にいた私は、気がついていない。

というのは先刻、二十五菩薩に扮する人たちの仕度準備の様子を見ていたからだ。

事前に申し込めばお練りに参加できる、二十五菩薩の志願者は当然お年寄りが多い。お稚児さんたちの控室が芸会の舞台裏なら、菩薩さんたちの控室はさながら素人芝居の楽屋といったところ。賑やかで意気盛んだが、身のこなしはやや不安。そんな人たちの面倒をみる奉仕の婦人たち、明かるくてきばきした振る舞いが気持ちいい。都会では年ごと日ごとに失われていく一

帯感がここにはあった。

二十五菩薩の先頭に立つ地藏の役を得た人は、これが二度目の体験、東京からの参加。「装束を着けてお面を被ると、心境が変わります。お練りしてるうちに、娑婆を離れて浄土が見えてくるような……」という。この人のグループとは、昼どきに門前のうどん屋で逢ったのだが、「これが済んだら、車で西国観音霊場めぐりです」と笑っていた。闊達で行動的な信仰の楽しみかただ。錦の衣装類や、光背の作り物は思ったほど重くはなかった。けれど、仏様特有の半眼の面をつけてみると、極端に視野が狭まることを知る。失礼ながら自然、おぼつかない歩みにならざる

参詣の人が絶えない誕生寺本堂



をえない菩薩さんたち。それで介添えの手引きが必要なのだった。「重い持ち物はなるべく男性が持つてあげてください」、注意を呼びかける世話係の若い僧があとでいっていた、「ほんとうは、それぞれに持つ古典楽器は決まっていますんですけど、なにしろ馴れないことです……」と。

ある高名なフォトグラファーは風景

写真を撮るときにも、「きれいだねえ、はいチーズ」と声をかけるといふ。私は二十五菩薩のお練りにカメラを向けながら、「しつかり、うつむかないで」とフリンダーにつぶやきつづけた。菩薩さんがしよげてちや絵にならない。ひとり、仕度のときからめだつて小柄な老婦人がいて、おそらく八十は超えていたろう。彼女はよほど足元が不安だつたらしく、とうとう下を向いたままだった……。

称名念仏の零田気

法然さんの生まれ故郷、誕生寺のある久米南町（ななみち）というところは、名勝後楽園で知られる岡山市から五〇キロほど、

本堂わきの両幅の掠の木



中国山地に分け入った山間の小さな町。

鉄道だと、ローカルなJR津山線に同名の駅がある。

四月第三日曜にあたる十七日、恒例の練供養会式の朝、誕生寺駅の狭いホームは参詣客であふれた。道を尋ねるまでもないのだが、近くで遊んでいた子どもたちに、「娑婆堂はどこ」と聞いてみる。この子らにとっても、ハレ

の日。誘い合わせ、うきうきした足どりで案内してくれた。

線路をくぐり、誕生寺を開いたとされる熊谷次郎直実（法力坊蓮生）ゆかりの念仏橋からは、門前までまっすぐな田園の道。まもなく右手に娑婆堂があり、案内の子らはそこに遊び仲間を見つけて駆けて行く。

誕生寺の練供養は、法然上人ご両親の菩提を弔う行事。二十五菩薩がこの娑婆堂に至り、予めそこに安置されたご両親の木造を輿に移して、極楽浄土に見たてた本堂に迎え、供養をする。

娑婆堂から山門にかけての参道には、露店が軒を並べていた。

古びた筋堀が両翼を広げる山門（三



間医薬門)の内、背後に丘を背負った誕生寺は、念仏門の聖地にふさわしい様子のよさを漂わせる。

本堂ではすでに回向の読経が始まっております、参集し一心に唱和する人々の

声が堂内外にあふれる。五間四面重層入母屋造りの、本堂は御影堂とも呼ばれ、ご本尊は法然上人自ら彫られたという四十三歳の等身木像。これには、帰郷する暇のない法然さんの名代として、熊谷直実が京都からはるばる背中合わせに背負ってきたという逸話がある。

参詣者たちは、法然上人誕生のときの奇瑞を伝える両幡ふたはたの棕むくの木、産湯の井戸、ご両親をまつる勢至堂せいしどうなど、境内のあちこち観てまわりながら、練供養の始まるのを待つ。

浄土院の脇から丘にのぼる道を、歩く間も読経は絶えず聞こえている。眼下にのどかな田園風景を眺めるうちに、ふと「なあむあみだぶ……」、念仏を唱

法然上人産湯の井戸



えていた私は、自分で驚いた。ばかな話だが、合掌してころのうちは唱えても、私はいまだに念仏を口称することが、むずかしい。うまく説明できないが、気恥ずかしさみたいなものがあり、地声がでかいという意識も邪魔をする。

それがこのとき、ふっきれたのは、まちがいに環境がよかったからだと思う。「いいもんですねえ」と、あとから上がってきた初老の紳士がいう。信州からきたというその人は「家の宗派はちがうですがね」と笑った。

そうしてのちの、練供養だった。娑婆堂まで出向いた長い行列は、一時間ほどして本堂に帰ってくる。

「菩薩さんたちは疲れて足どりが重くなりますが、金色のお面が西日にきらきら輝きましてね、極楽浄土を彷彿とさせる、お帰りのお練りもいいですよ」
そう教えてくださったのは、もう三十年も練供養会式の進行役を務めている檀信徒の文化人、中島義雄さん。奉仕にでる母親に連れられ、「小さいときから、お寺の畳のうえで育ったようなものです」という。

今年出人出がやや少ないそうで……。それは同じ日、ここからもそう遠くない英田町に町おこしをかけたF1レースの開催があり、そちらのほうに団体のバスをとられてしまったからだ、と苦笑する。

法然上人のご両親が子授け
祈願をした本山寺の三重塔



中島さんはまた、「このお練り供養には、浄土真宗のほうからも熱心に参加される方が多いんです」ともいつていた。

そうこうするうちに、練供養の行列が帰ってくる。迎える観衆の熱気も送るときほどではなく、一行みなさんお疲れの様子は隠しきれないものの、た

しかに西日の演出は効果的だった。無事、本堂に帰った菩薩さんのひとりに「どうでした」、そつと耳打ちしたら、息をはずませながら「とても、よかったですう、ありがとうございましたあ」とのこたえ。ご苦労さまでした……。

帰途、車で隣り町柵原やなはらの山中に、法

然上人のご両親が子授け祈願をしたという、天台宗本山寺も訪ねてみた。誕生寺よりずっと奥深く、古色蒼然とした本堂や三重塔に、密教道場らしい秘めた雰囲気と、冷厳な空気が横溢して、春の陽がかける。

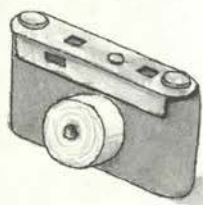
法然さんは、一人っ子だった。そして自身はついに、帰郷することがなかった。その心中を想うと、身体がふるえた。

午後の日差しの中で

〈第六回〉

消え行く言葉

吉川英明



少し前のことになるが、ある会食の席で、私の叔母が、

「私は南京豆が好きなんです」と言った。

別に違和感はなかったのだが、私が意地悪く言葉尻を捕えて、

「今、南京豆って言う人は少なくなったね。若い人だと、何のことだかわからない人もいるんじゃないかな」

と言うと、皆、そう言えばそうだなあと腕を組んで、ひとしきり、今では使われなくなった言葉の話題に花が咲いた。

その席には、さまざまな年代の人がいて、私の母とその叔母が最年長だったが、大正生まれの母は、今でも美容院という言葉を使わない。

「ちよつと、カミさんへ行ってくる」と言う。

「カミさん」つまり「髪結いさん」である。

「カミさん」という訛りかたは、東京、それも下町独特のものではないかと思うのだが、今の若い女性にカミさんと言っても、十人のうちわかる人は何人いるだろう。

日本髪がすたれて、髪を結うという習慣がなくなつたためだろうが、美容院より髪結いの方が、言葉として数段美しい。情緒がある。

先頃「髪結いの亭主」というフランス映画の佳品があったが、あの映画も「美容院経営者の夫」では、客足も半減するだろうし、昔からあ

る同じ俗諺も、それではサマになるまい。

こう書いて気がついたが、この「亭主」も、死語とは言わぬが、今や瀕死の状態だ。

「写真機」も死語に近い。大方の人はわかるだろうが、日常の会話で使う人はまずいない。美容院をカミさんという母でさえ、写真機はカメラである。これは、南京豆とか落花生と言わずに、ピーナツと言うのと同じく、外国語に取って代わられた例だ。

『広辞苑』の第四版が出た時、新しい見出し語一万五千が増えた代わりに、数百だか数千の項目が落とされたと、どこかで読んだ。

私が、そのことを言うとき、

「そういう言葉を集めて、死語辞典を作つたらどうだろう」という話も出たりした。

だから、それから半年ばかり経ったある日、書店の平台に、その『死語辞典』を見つけた私は、我が意を得たりとその場で買った。

それは、『広辞苑』の岩波書店ではなく、朝日ソノラマの発行で、大泉志郎、大塚榮寿、長沢道雄という、新聞記者出身の三氏の共著であった。

収録されているのは、辞書からも落ちてしまった完全な死語ではなく、昭和一けた生まれの三氏が、実感として、使われなくなったと思う言葉五百六十一語を解説した四六版で、言葉を引くというよりも最初のページから通読したくなる読み物に仕上がっている。

とにかく、巻末の索引を見ているだけで面白い。

ざっと拾ってみても……アベック、荒物屋、

おしたじ、合羽、猿股、シャボン、女中、ズロース、総天然色映画、蓄音機、停車場、ニューム、ねんねこ、ハイカラ、八頭身、バラック、火箸、父兄、めんこ、モボ・モガ、藁半紙、等……昭和十三年生まれの私も実際には使ったことのない言葉から、あ、こんな言葉があったなあと当時を思い出す懐かしい言葉まで、五百六十一語がずらりと並んでいる。

大きくは、国家体制の変化から、小さなところで、風俗、生活、習慣の変化、あるいは技術革新による新製品の出現など、これらの言葉が消えて行った原因はさまざまだ。

甲種合格、防空頭巾、ガリ版、銀しやり、たらい、ちゃぶ台、土人など、一目で消えていった理由がわかる言葉も多いが、考えてみると、

この本に収録されているもの以外にも、対象となる物や現象は残っているのに、言葉だけが使われなくなった例も、結構あることに気がつく。その多くは、先のピーナッツやカメラのように、言い換え、つまり外来語に取って代わられているものだ。

それらは、さしたる理由もなく、ただ単にかっこいいというだけで言い換えられているのだろうが、そうなった責任の大半は、新聞や雑誌、最近ではテレビなどの媒体にある。

外来語に言い換えること、即ち悪だとは言わないが、落花生などという美しい日本語が死んでいくのを見るのは何とも淋しい。

外来語といえ、その使われかたが正確でなかったり、適切さを欠いたために改められた言葉もある。

先に上げたアベックが使われなくなった代わりに、ちよつとニュアンスは違うが、カップルという言葉が登場したし、会社勤めの女性を指したビジネスガール・B Gは、本来の意味が違ふということ、オフィスレディー・OLに改められた。

これもマスコミが先導して改めたのだが、このOLという言葉にも、私などは、ちよつと首を捻る。レディーと呼ぶのが憚られるような女性にも、往々にしてお目に掛かるからである。

笑ってしまうのが、トルコ風呂だ。

まさに売春そのものというトルコ風呂の現状に憤慨したトルコ人から改名を迫られ、週刊誌やスポーツ新聞が、慌てて代案を考えた。そして、あつという間に、ロマン風呂と改名してしまったのは記憶に新しい。強引に定着させた

いう印象だったが、この例を見ても、メディアが言葉に及ぼす力の大きさを思い知らされる。

もう一つ、おかしいのが「E電」だ。これは、メディアがそっぽを向いたために、恐ろしく短命に終わってしまった。

国鉄の民営化に際して、一般から公募して決めた名前だが、当初から評判がよくなかった。

アルファベットと漢字一文字ずつを組み合わせた字面が実に醜悪であり、意味も不明である。

嫌なものが出来たなと思っていたら、消えてしまったのでホッとしている。

しかし、このE電にしても、決定後、新聞や週刊誌が使っていたら、今頃は立派に市民権を得ていたろうと思うと、メディアが言葉の活殺を握っているという現状が恐ろしくなってくる。

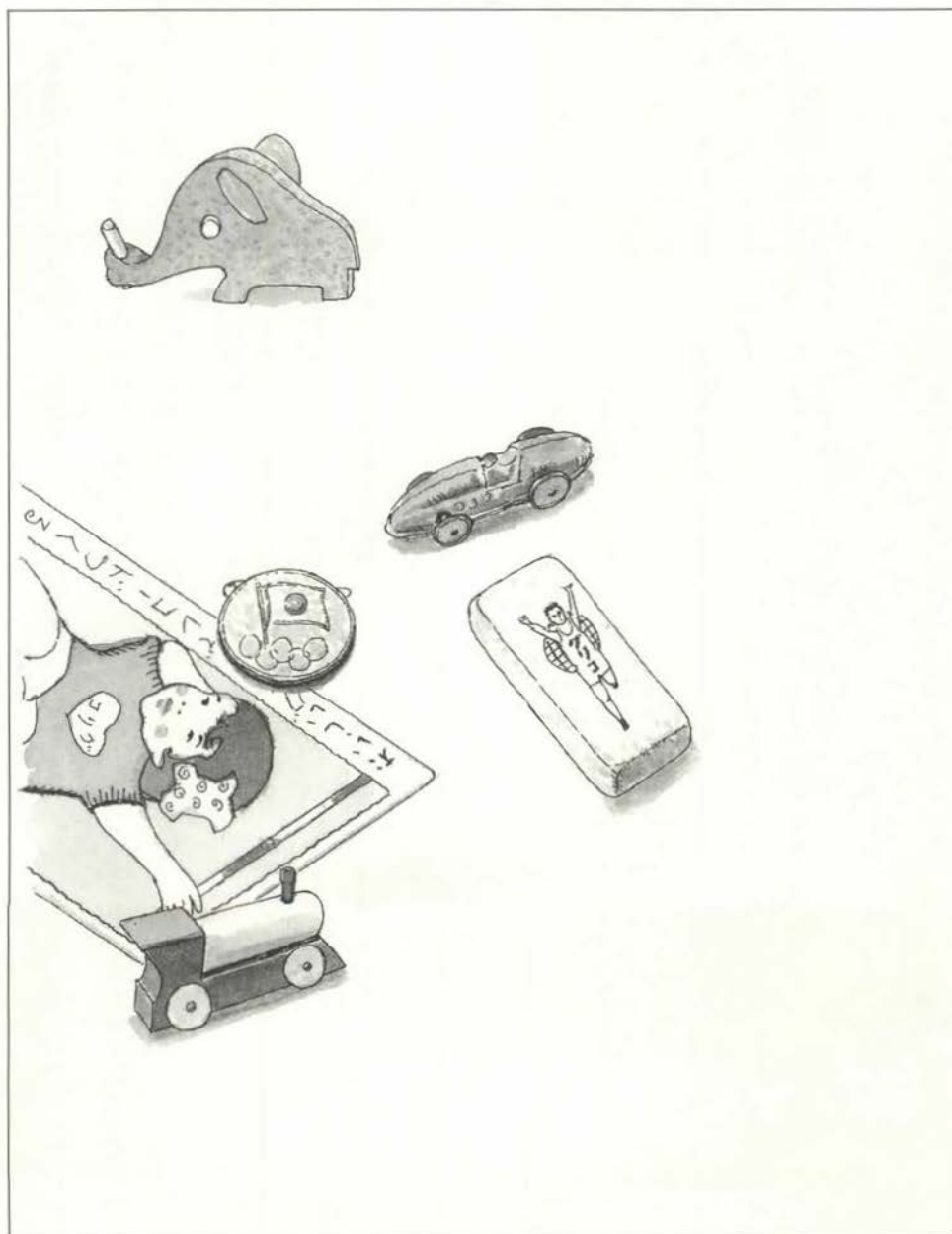
る。

そう思っていた矢先、先日、NHKのニュースを聞いていて、面白い言葉があるのに気がついた。NHKニュースでは、使い続けているのに、日常の会話では、今やほとんど使われない言葉があったのだ。

「マイカー」である。

いつごろから使われ始めたのか確かなことはわからないが、自動車が急速に普及し始めた昭和四十年代半ばごろのことらしい。平凡社の『世界大百科事典』には、そのころ、

「自動車を生活に不必要な贅沢品扱いする風潮は消えず、自家用車を蔑視の感情を含めてマイカーと呼んだ」とある。



横道にそれるが、蔑視の感情が含まれていたという記述には驚いた。当時、この言葉の中に蔑視というほど強い感情はなかったように思う。

私はむしろ、軽い羨望あるいは、ちよつとしたやつかみといった種類の感情が込められていたと思うのだが、とにかく「マイカー族」とか「マイカー通勤」などという言葉が盛んに使われたものだった。

しかし、その後自動車の普及率が高まり、「マイカー族」が新しくも珍しくもなくなってくるにつれて、マイカーという言葉も次第に使われなくなったのだ。

そのころにはなかった「暴走族」が跋扈している今、若い連中との会話で、

「今度の旅行、マイカーで行くのかい？」

などと言おうものなら、怪訝な顔で「ダサイおじんだな」と軽蔑されるだろう。

それをNHKのニュースで耳にして、改めて、ニュースでは日頃からかなり頻繁に使われていることに気がついた。

「連休の初日、主な高速道路は、行楽地へ向かうマイカーで混雑し……」

の如くである。何故、

「行楽地へ向かう車で……」

ではいけないのだろうか。

大体、このマイカーという言葉、E電と同じく、私は大嫌いだである。

MY CAR という極めて普遍的な英語を幼稚な形で転用し、ある特別な意味を持つ名詞として流布させた。結果として、先に述べた蔑

視とか、やつかみとかいう、陰湿なイメージが言葉について回った。

マスコミも、変な言葉は造り出したら垂れ流しにせず、用済みになったらさっさと引っ込めて欲しい。今や、マイカーを車と言ひ換えて、まったく支障はないと思う。

こういうと、じゃあ何故車を自動車と言わないのかと訊かれそうだ。

「自動車」は「写真機」と同じく、日常の会話では減多に使われない。

だが、完全に「カメラ」に乗っ取られた「写真機」と違って「自動車」と「車」は、厳密にはないけれど区別して使われているような気がする。

つまり、今や国民の足代わりにまで普及した乗り物の意味で使われる場合は「車」であり、

日本を代表する工業製品としての場合には「自動車」が普通使われる。

「自動車の輸出」「自動車の生産」「自動車摩擦」などの場合である。

これは私の推測だが、「自動車」を「車」と言ったのは、人力車の時代からの引き継ぎではないかと思う。

「お迎えの車」「お伴の車」などと言われると、何となく「俤」という字を連想する。明治大正の情緒を引き摺っているような気がして、これはこれで、あってもいい言葉だなと思ってしまふのである。

ここまで書いて、十数年前に死んだ明治生まれの叔母が、人力車のことを「リンリキ」「リンリキ」と言っていたのを突然思い出し、懐かしくなった。

(作家)

利根川裕のマイアングル

10

教師歴二十数年

利根川 裕

数えてみれば、わたしの教師歴はかなり長い。

一番最初が、東京都立上野高等学校。

大学を出たところである。大学の哲学科卒業のわたしは、ここで社会科の教師となった。

社会科といっても、中身はいろいろあるのだが、わたしは世界史を受けもつことになった。これはわたしの都合ではなく、社会科の教員の割りふりから、そうならざるをえなかったのである。

わたしは史学科を出たわけではないの

で、歴史についてはほとんど無知同然であつた。第一、世界史という概念自体が新しいもので、かつてわたしが中学校や高等学校で習つたころは、西洋史・東洋史・日本史という区分けであつた。

なんにも知らなかつたことは、すくなくともわたしにとっては、たいへんいいことであつた。とにかくはじめて、独学で歴史というものを学びはじめたのである。これが、じつに面白かつた。歴史という大舞台での人間のドラマ。

そして、自分の感じとつたドラマを、できるだけドラマチックに生徒に伝えようとした。空想力が刺激されると、もう空想のおもむくままに伝えてみた。ほとんどフィクションのようになって、あ

えて自分を抑えなかつた。なにはともあれ、ここに生きた人間のドラマがある。それを感じとるのが歴史だ、と思ひこむことにしていた。

おかげで、生徒たちの作つた数え唄で、
へ八つとせ、ハツタリ七分にウソ三分、利根川先生の名調子

とからかわれることになった。

後年、卒業した生徒たちがわが家へやってきて、だいぶ酒もまわつたころ、この数え唄を大合唱した。

当時、まだ元気で、わたしと同居していた母が、この歌を聞いてびっくり仰天したらしい。歌い終るのを待って、肅然とした様子で宴の部屋へ入ってくると、
「あのう、うちの息子（つまりわたし）

は、みなさんがたに、ハツタリとウソだけ教えて、何ひとつ真実というものをお伝えしなかったのですか」

と切りだした。一瞬、みんなはぎょつとしたが、つぎの瞬間、それまでより大声をあげて、この八つとせのくだりだけを繰り返し繰り返し歌った。とんでもない連中、といわなければなるまい。

けつきよくわたしは、九カ年この高校の教師をしたあと、職業をくら替えして出版社の中央公論社に入ることになったが、この教え子連中とは縁が切れなくて、いまでもワイワイガヤガヤの関係がつづいている。

ついでに言えば、わたしがラジオ番組に出るようになったのは、TBSにいる

F君が引つ張りこんだからであり、テレビ番組に顔を出すようになったのは、テレビ朝日にいるA君に拉致された結果である。

そしてまた、わたしは二度家を建てたが、これを一切とりしきったのは、設計家のS君である。S君はこの世界でも有名な設計師だが、

「こういう家にしますから、住みかたはこの家に合わせてください」

と宣言するのだから、こちらはもうお手上げである。

さらにまた、わたしの収入やら税務やらを一手に握っているのが、税理会計士のO君である。

「このごろ使途不明金が多くなっていま

すね。これはアヤシイナ。気をつけてください」

などといわれると、わたしとしては、ただただ恐縮の態を装うばかりである。

コイツらが集まると、

「トネさん(コイツらは恩師に向かって、かくも無礼な呼びかたをするのである)を生かすも殺すも、われらの掌中にあるのだから」

と豪語して憚らないのである。

さてわたしは、中央公論社に七年半ほどいて、自由業に転身した。とにかくこれからは原稿用紙に字を埋めて生活するしかない、と決意を固めていたら、文教女子短大(当時は立正女子短大)から、講師にならないかとお誘いを受けた。

そういつてきたのは、いま早稲田大学教

授で、昨年第一回宮沢賢治賞を受けた原

子朗さんであつた。原さんは現代詩人賞を受けた詩人でもある。これが原さんと

の初対面だったが、いきなり、

「演劇論という講座をやれ」

とのご託宣。

「そんなもの、出来ません」

「いや、出来る」

「では、やります」

口説くほうも口説くほうだが、口説かれるほうも口説かれるほうである、とでもいうしかないような問答のあげく、ここへ出講することになった。

が、ここでもまた、わたしは泥棒を見てから縄をなうことになった。それまで

無責任な趣味や道楽で、かなり数多く芝居は見えてきていたが、演劇論なんて身を入れて考えたこともなかった。

それに聞けば前任者は、劇作家・演劇評論家として著名な青江舜二郎氏だったということ、こちらはますます身の縮む思いであった。

かくてまた、わたしの独学がはじまった。古代ギリシア演劇から近代劇まで。その流れを大あわてで仕入れにかかった。その手口は、かつて世界史を仕入れたのと同様である。そしてこれも、自分では自分なりに、じつに面白かった。この面白さを手ぶり身ぶりで講義したわけだが、相手が女子学生だったので、ハッター七分にウソ三分、などという数え唄は出来

なかった。

この女子短大では、非常勤講師の身分のまま、十九年間もいた。

「これ以上いたら、校庭の真ん中にわたしの胸像を建てなければならなくなりますから、このへんで退きます」

とクソ生意気なギャグを飛ばして辞めてしまった。

じつはこのとき、すでに早稲田大学教授となっていた例の原子朗さんが、またやってきて、

「早稲田の政経学部で一講座持たないか」とのこと。そしてまた、例のような問答。

「こんどは、何を教えるの？」

「近代文学」

「そんなもの、やれっこないですよ」

「いや、出来る。出来るようにやればいい」

「じゃ、やりますか」

といった具合である。

たった一年だけだったが、ここでの授業は楽しかった。五、六百人入る大教室での講義だから、ほとんど講談・近代文学をブチまくるという態であつたが、野次馬半分の好奇心で集まってくる学生集団の熱気を前にして、こちらはこちらで、こんな青二才に揚足とられてたまるか、とばかり、大いに張り合つてみた。

一時間半の大講談が終ると、こちらはタタタに疲れて、すぐさま大隈会館のレストランへ駆けつけて水割り焼酎をおるのだつた。

このあと一年、大学講師と縁を切つていたら、武蔵野女子大学副学長（いまは学長）の大河内昭爾さんから、

「うちで近代文学の講義やらないかね」とのこと。

これはもう、早稲田で腕試ししてあつたから、すぐに引きうけた。ここて五年。相手がしとやかな女子学生ということもあつて、早稲田でのような熱気には至らなかつた。

そして、今年の四月から、新設の新潟経営大学で、こんどは講師ではなく教授として講義することになった次第である。

通算すれば、三十数年の教師体験である。

（作家）

現代の快僧その五

日蓮宗真間山弘法寺貫主

酒井日慈さん

超宗派仏教を目ざす “裏方”和尚

取材文 稲葉小太郎



ここに一冊の本がある。タイトルは『小僧の花かんざし』（水書坊刊）。寺の跡取りとして生まれた天明八十八という名の少年が、住職である父に反発して寺を飛び出し、昭和初期の華やかなりし浅草を徘徊。演劇の世界にのめり込む。そのうち時代は暗雲立ち込め、太平洋戦争の開幕とともに学徒動員で徴用されてしまう。その過程で出会う少年たちとの友情と少女たちとの

さかい・にちじ●一九一九年東京都生まれ。法政大学卒。池上の実相寺住職のかたわら、テレビ、ラジオのシナリオを書く。一九七四年超宗派の仏教活動である「南無の会」を組織した。大本山本門寺に勤務をへて現職。著書に『寺の家族』『人間大好き』ほか。

甘い関係を、ちよつとぶつきらぼうな筆で描き出す。

読む者をして懐かしいような、切ないような、そんな気持ちにさせるこの小説は、実はかなり自伝的な要素の強い作品なのだという。書いた

のは僧多聞さん。本名を酒井日慈といい、千葉
県市川市にある日蓮宗の本山真間山弘法寺の貫
主である。

酒井さんの小説を読んで思ったのは、登場す
る女性がみな魅力的なこと。少女のよう
な可憐さと母親のような慈愛を合わせもった女
性が次々に登場し、主人公の八十八に心を寄せ
る。これが自伝的小説だとしたら、酒井さんも
さぞかしモテたのだろう。

そういえばこの真間山弘法寺というのは、『万
葉集』で類まれなる美人と歌われている真間の
手児奈で知られる土地だ。今に伝わる話では手
児奈というのは固有名詞とされているが、実は
アイヌ語で「可愛い娘」という意味らしい。つ
まり美人の産地で有名だったわけ。酒井さんが
このお寺の貫主になったというのも、面白いで
すね、というところ。

「とんでもない、オレはとにかくガキのころか
らもてたつてことがないんだ。小説だったら自
分だけでもてさせることができるだろ。こんな楽
しいことはないよ」

と大声で笑った。本人が楽しんで書いたもので、
みんなを楽しませる。天性のエンターテイナー
と評されるゆえんだらう。

人を楽しませるのが大好き

酒井さんには「僧多聞」名義の作品がほかに
もいくつかあるが、どれもお坊さんの余技と呼
ぶことはとてもできない、魅力的な作品ばかり。
ドラマチックな展開で読む者を飽きさせない。
それもそのはず、酒井さん自身が「オレは坊主
には向かぬえんだよ」というとおり、ほかのお
坊さんには体験できないような人生のコースを
歩いてきたひとなのだ。



真間山弘法寺の「人間学校」の門前にて、その設立の思いを語る僧先生。

その紆余曲折はのちに、超宗派の仏教活動を展開する「南無の会」として結実する。酒井さんは日蓮宗出身だが、臨済宗妙心寺派の松原泰道さんを会長に、曹洞宗の無着成恭さん、浄土宗の寺内大吉さん、浄土真宗の花山勝友さんなど仏教界のスターが喫茶店で説法する姿は、話題になったものだ。

南無の会は現在でも北は盛岡から南は沖縄まで、全国三十カ所の会場で毎月辻説法を行ない、日本の仏教界でも際立った活動を続けている。

酒井日慈さんは一九一八（大正八）年、浅草松葉町（現在の台東区松ヶ谷）にあった実相寺の長男として生まれた。本名は西（みのる）。父親とは五十歳も年齢が離れていたせいかわ、甘えたり、一緒に遊んだ記憶がない。子どもを見れば「不良」「勘当」という言葉が出てくる、父親よりは師匠という感じだったという。

のちに実相寺は池上に移転する。小学校のころから酒井さんはひとを楽しませるのがなにより好きで、自分たちで芝居を作って演じたこともある。中学二年のときに家を出て、市川の弘法寺にいた義兄（姉の夫）のところに身を寄せる。学校も行かず、そこから毎週のように浅草の映画館や芝居小屋に通うことになる。当時の常盤座には古川緑波、徳川夢声らそうそうたる顔触れが集まり、自由奔放な喜劇を演じていた。

ある日、新聞に神田の中学校で生徒を募集しているという記事を発見。受験してみたところ、見事合格してしまった。現在の錦城高校である。

その後、法政大学に入学。在学中から新協劇団という左翼系の劇団に研究生として所属。最初は俳優志望だったが、演出部に配属され、演出の勉強をすることになる。千田是也演出による「遁走譜」という劇の演出助手をつとめたの

だが、台本を理解し、俳優を的確に配し、舞台装置をつくり、客を感動させるために一番効果的な方法を考える。こうした芝居作りの面白さを学んだという。

大学卒業を前にして、徴兵検査を受け、召集。軍隊には終戦までの五年間いた。このへんについては僧多聞名義の『シヤツを襦袢というところ』という小説に詳しい。

戦争から帰ってきてみると、世間にはなんとも暗いムードが漂っていた。敗戦のショックと貧困、治安の乱れ。そんな世相をなんとかなくちゃ、と「化粧座」という喜劇芝居を演じる劇団を始めた。それまで演劇といえば外国の芝居ばかりだったのを、自分たちで脚本を書いて喜劇を演じたのは、ひとびとに少しでも夢と希望を与えたいという気持ちだった。このへんに酒井さんの、ひとを楽しませるのが大好きとい

う性格がよく出ている。

二十八歳のとき父上が亡くなり実相寺の住職となるが、貧乏生活は変わらない。劇団を維持するためにも、テレビやラジオのドラマの台本を書く毎日だった。

女子学生の問い

南無の会はちよつとした偶然から始まった。

今から二十年以上前のこと。ある日酒井さんが池上本門寺で仕事をしていると、四、五人の女子学生がやってきた。大本山にいきなり誰かが尋ねてくるというのも珍しいが、しかも女の子である。何の用かと聞くと、質問があるという。

「お墓には細長い木の板（塔婆）がたくさん立っているけれど、それにみんな南無妙法蓮華經と書いてあるでしょう。あの、南無ってなんですか」

酒井さんはびっくりした。同時にいたく感激した。

「南無ってどういう意味かだつて？ あんたたち、素晴らしいことを聞いてくれた。南無というのは宗教の一番根っこにあることだ。オレたちは檀家のひとたちにもまず、南無の意味を教えなくちゃならないのに、全然やってこなかった。みんな南無妙法蓮華經とワンセットの呪文みたいなものだと思っているものな」

さっそく女子学生たちを招き入れて、南無という二文字の持つ意味について二時間ほど話をした。

「南無というのはね、とことん信じるということなんだ。命がけて信じるということなんだよ。だから南無妙法蓮華經というのは、私は妙法蓮華經というお経を命をかけて信じますということ。南無阿弥陀仏というのは、阿弥陀様を」と



人間宣言——自らを坊主に向いていないという僧先生の人柄がにじみでている。

とん信じます、ということなんだ」

興奮冷めやらぬその晩すぐに、若い僧侶仲間を集めて話をした。

「今日、オレは素晴らしい連中に会った。女の子が南無とはなんだって聞いてきたんだ。オレたちは檀家に南無とはなにかを教えているか。いないだろ」

考えてみる、信仰の原点は南無じゃないか。十五歳にも満たない女子学生がそういうことに興味を持つなんてすごいことだ。でもあの女の子たちだって、四、五人で来たからお寺の高い敷居も跨いできたけれど、一般のひとがわざわざそれを聞きに寺を尋ねてくれる気になるだろうか。

それじゃあ、我々のほうから街へ出たらどうだろう。本来我々の宗祖日蓮聖人は辻に立つて説法したというじゃないか。オレたちもひとび



行事の進行などの打ち合わせで弘法寺の一日が始まる。

との中へ出ていこう。

一気にしやべると、みんなが、

「面白い」

「やりましょう」

賛同してくれた。

喫茶店で法を説く

ところが現代の東京において、街頭に立つて説法など始めたら、たちまち交通渋滞を引き起こしてしまうだろう。では現代における辻とはなにか。不特定多数のひとが気軽に集まれる場所、落ちついてゆっくりしやべれる場所はどこか。

「それは喫茶店じゃねえのか」

「そうだ。オレたちで喫茶店を持つとうじやないか」

そのときたまたま原宿の明治通り沿いに写真

機材メーカーのヤシカのビルが新しく完成し、テナントを募集していた。原宿といえど若者の街。ちょうどいい、とみんなで資金を出し合ってヤシカビルの地下一階に喫茶店を開店した。店名はそのものずばり、「茶房ナーム」。一九七四年九月のことである。

辻説法は毎週水曜日、午後七時から九時まで行なうことに決めたのだが、初めは不安もあった。いきなり名もない坊さんたちが説法をやるといったって、果たしてどれだけのひとが集まってくれるのか。むしろ敬遠されるんじゃないか。

そこで前半の一時間はひと集めのために、歌や漫才などのアトラクションをしよう。それでひとが集まったら、後半の一時間は説法しよう、ということになった。

ところがそうして一年間続けてみたものの、

席数六十の店内に聴衆が多いときでせいぜい二十人。盛況というには程遠い、寂しい状態だった。

「いったいオレはなにをやっているんだろう。毎週毎週アトラクションの芸能人の約束を取り付けるために走り回って、これじゃあ芸能プロダクションやっているみたいじゃないか」

酒井さんは思った。よし、どっちにしたってひとが集まらないんだったら、もういい。説法そのもので勝負してやろうじゃないか。辻説法を二時間ぶっとおしてやろう。さいわい名もない若い僧侶はたくさんいる。彼らが自分のことを語るといふことにすれば、ネタには事欠かないだろう。

しばらく充電期間をおいて、一九七六年一月に辻説法を再開。そして当日、茶房ナームは満席になった。若い僧侶のひとことひとことに、

聴衆は真剣に耳を傾けていた。このとき酒井さんは深く反省したという。

「ひとに法を説こうというのに、歌や踊りで人集めしといてそれから説法するなんてふざける。たぶん、みんなそう思ったんじゃないか。

でも、ほんとうに真面目に、こころの底から話をすれば、聞いてくれるんだ」

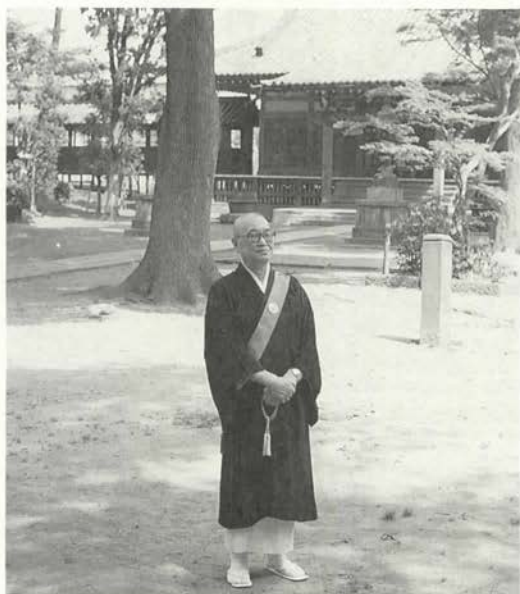
超宗派の活動へ

今から思い返してみれば一九七〇年代初めというのは、戦後次々に現れた新しい宗教に対して既成教団が危機感を強めていた時期であった。「そんなときに既成の仏教教団が、うちだけは正しくてほかは邪教だなんてふざけたことをいつている場合ではない。南無の心を持っている教団だったら、何宗でもいいじゃないか。それこそ仏教じゃなくて、キリスト教だって仲間じ

やないか」

そう話すと、みんなも賛同してくれた。以前から親交があった寺内大吉さんとも語らい、いろんな宗派とのつながりもできた。会長には臨濟宗妙心寺派の松原泰道さんを迎えることになった。

ところが……。松原泰道さんの初めての説法の日。あいにく都内はひどい台風に見舞われた。雨は激しく降り、電車が止まった。通りは水浸しだった。会場の茶房ナームは地下にあったため、ゴウゴウと水が流れてくる。これじゃお客さんにも来ないと諦めていたところ、なんと、七時をまえにして会場は七十名近い聴衆でごった返すほどになってしまった。それだけベストセラー『般若心経入門』の著者の人気は高かったということだろうが、この雨では肝心の講師が来られないだろう。しょうがない、オレたち



山門正面に位置する祖師堂。広々とした境内を訪れる人は多い。

でお茶をにごすか、と話していた矢先、松原泰道さんが法衣の裾をからげて入ってきた。

スタッフや聴衆も感激したが、松原さんも感激した。

「私ははつきりいつて喫茶店で説法するとは不謹慎な……と思っていたが、今日は驚きま

した。私の話をみなさんがこれほど熱意を持って待ってくださっていることを、不明にして知りませんでした」

あとでスタッフに語ったという。

それからというもの、仏教界のそうそうたるメンバーが講師として活躍。寺内大吉さん、紀野一義さん、花山勝友さん、俳優の美輪明宏さん、浄土真宗の永忠順さん（永六輔さんの父）、仏教学者の金岡秀友さん、新義真言宗の岩堀至道さん、現在は雑誌「大法輪」の編集長を務める渡辺照啓さん。名前を書いていくだけで当時の熱気が伝わってくる。

NHKをはじめ、テレビ、ラジオ、新聞でも辻説法の様子が報道された。

活動は次第に列島隅々に飛び火していった。各地から、同じような辻説法の会を開きたいのだが、ついでには「南無の会」という名称を使わ

せてくれないだろうかという問い合わせが相次いだ。こちらとしても、もちろん異存はない。やがて全国三十カ所以上で毎月定例の辻説法が行なわれるようになった。

日本一の草鞋作り

ここでちょっと不思議に思うのは、酒井さんはこうした活動を、日蓮宗の運動として展開することもできたはずだということ。日蓮聖人は法華経による救済を説き、「念仏無間、禪天魔、真言亡国、律国賊」と激しく他宗を攻撃した。しかし酒井さんのアプローチはまるで違う。もつとも排他的（に見える）な日蓮宗から、こういう超宗派の活動が生まれたというのも面白い。その理由はひとつには、当時世間を騒がせていた新興宗教の多くがお題目を基調とする教団だったこと。ここで日蓮宗が前面に出て、誤

解を招くという配慮があった。

もうひとつは、酒井さん自身のなかの、ある思いが影響している。

酒井さんが四十歳を過ぎたころ、ふと「おれの人生も知れたもんだな」と思った時期があったという。

子どもなら誰でも夢を見る。大きくなったら大将になって、国のために戦うんだ。それが無理とわかってても、二十歳なら頑張れば佐官になれるだろうという希望は残る。しかし現実はどうはいかない。四十歳を過ぎれば、自分ではどうあがいたって将官にはなれないとわかってしまう。

そうわかってしまったときのショックといったらなかった。これから何十年寿命があるかはわからないが、オレの人生、こんなものを知ったときは、しばらく食事がまずく感じたとい



「人間学校」で行なわれる講演会は地元の人に支持されている。

う。

しかしここでくさってしまわないのが酒井さんのいいところ。どうせ下士官止まりだったら、気のきいた下士官になってやろうじゃないか。だいたい戦争というのは下士官がやるもんじやないか。そういえばこんな道歌があった。

駕籠に乗る人

担ぐ人

そのまた草鞋を作る人

よし、そんなら日本一の草鞋作りになってやる、オレの草鞋を履いたら、もうほかの草鞋は履けねえというくらいのを作ってやろうじゃないか。

そう決心してから徹底して草鞋作り、つまり自分は裏方なんだという姿勢を崩さなかった。

丸い雑誌でもいいじゃないか

喫茶店での辻説法。なんともユニークな発想だと思う。だが酒井さんのアイデアはこれにとどまらない。雑誌「ナーム」の発刊、南無道場が続く。辻説法という実践活動に加えて、より多くの仲間とつながるための雑誌メディア、さらに実際の行を体験したいひとのための道場。この三つの柱が南無の会を作った。

「ナーム」は一九七四年六月の創刊。雑誌作りにおいても酒井さんのユニークさは秀でていた。たとえば仏教漫画の掲載など、徹底してわかりやすい雑誌を目指した。そのユニークさは「雑誌が四角じゃなきゃいけないなんて決まりはない。丸い雑誌があつたっていいじゃないか」という発言にも現れている。

このように仏教の超宗派活動を縁の下から支

えてきた酒井さん。やはり、若いころ芝居の演出で鍛えられたことが大きいという。

「若い坊さんにはいつも、学生時代に演出だけは勉強しておけといってるんだ。演出というのは総合的な勉強。台本から照明からぜんぶ掌握してなきゃならない。そういうことが坊さんになってからきつと役立つんだ」

日蓮上人の七百遠忌のとき、企画を任された酒井さんは春と秋の法要をまとめた。そのとき法要というのは芝居だと気づいたという。

それにしても、縁の下の方力持ち、というところへはいいが、南無の会の活動においては実は酒井さんが私財を投じていた部分も多い。酒井さんは十年前に「ナーム」編集長から退くのだが、その時点で一億円の借金があつたというからすごい。

「これも馬鹿な話なんだけどね、人間五十歳で

一億円借金できなかったらダメだと思っていたからね。雑誌じゃ食えないから、あちこちから借りて、ちょうど一億円あったかな。ま、一億でギブアップだよ」

しかし酒井さんの意欲はまだまだ衰えない。現在は貫主である真間山弘法寺の山門に、「人間学校」という看板を掲げている。月に一回、各界の講師を呼んで「人間」をテーマにした講演会を行なう。そのほか俳句教室、写経教室もある。

その「人間宣言」には、

人間だから

人間を愛し

人間を大切にしよう

人間だから

人間を磨き

人間を鍛えよう。

とある。オレは僧侶である前にまず、人間なんだ。そんな叫びが聞こえてくるようだ。人間が大好きな酒井さんの、集大成がここにある。

酒井さんにお話を聞いた翌日、ぼくは新宿の喫茶店で行なわれた「南無の会青年部」の辻説法に出掛けた。浄土真宗の若いお坊さんが、日本の仏教の歴史について話していた。酒井さんの語りがそれだけ熱っぽいものだったせいもあるだろうが、ちょっとクールな感じが気にかかった。

時代が違うといえども、酒井さんたちが会を始めた二十年前に抱いた危機感は、今は昔のことなのだろうか。今はもう、仏教の危機なんてないのだろうか。若い仏教者がそう感じているとしたら、それ自体がアブナイことだと思ふのだが。

念仏信仰と武士道

盛岡大学学長 高橋富雄



イラストレーション—小菅遼

この出会いの次の物語としてこういう話が出てまいります。蓮生房熊谷は、普段ずつと法然様のおつきの者のようにくつついておりました。

法然様は、熊谷が荒々しい気性の人であることがちゃんとわかっておりましたから、あまり目立たないように普段から注意してこの人を扱っ

ておりました。法然様に牙を抜かれてしまったのではありません。前と何も変わっていないのです。ただ、法然様の人徳が熊谷にそういった欠点をあまり出させないで、いいところだけを引き出すようにしていただけてです。

ほれぼれする先生様でございます。そのスナップ。あるとき、九条閔白、月輪閔白といいました。九条兼実という方のところに出かけることになりました。今日、閔白だの摂政など、歴史でだけ知っております私たちはそう大したものと思いませんけれども、この当時は、閔白・摂政といえますと、天皇代行ですから、天皇と同等の扱いを受ける人たちなのでございます。ですから、藤原氏の摂政・閔白というのは、私たちが考えるような臣下という考え方ではありません。

文字通り雲の上の人なのでございます。その九条兼実という方は閔白をやめてからも熱心な法然信者として、上人とは大変深いつき合いのあった方でございます。

あるとき、その月輪閔白の九条兼実公から、法話をしたいから、ぜひおいでくださるように、とのお使いがあつたそうでございます。法然様が出かけるということを書いて熊谷は、「私、お供になります」と言つてついでに「行状画図」には書いてあります。法然様は、熊谷が来ては何か面倒なことを起こすかもしれないと思つたけれども、来るなと言つたらもっと面倒なことになると思つて、そのままにしておいたと、あるのでございます。私は、これが真実だろうと思います。ですから、熊谷は前と何も

変わっていなかったのです。これが歴史だと思
いますし、こちらがより歴史的なのです。

こうして熊谷随行が実現します。しかし今申

したとおり、関白は雲の上の人です。その御殿
に昇ることは、特別な資格のある人でないとで
きないのでございます。法然様は法の師ですか



ら、別格です。招じ入れられて、奥の間で兼実公と向き合って法談を始められたのでございます。熊谷は地下人です。下々の者ですから、階段の下のところの手すりに寄りすがって奥のほうを眺めながら、どういう話を二人はなさっているか、聞き耳を立てていました。全然、声が聞こえない。腹を立てて蓮生房、階段の下から大声をあげて怒鳴ったと、あるのてでございます。深い信仰に入って悟りすましていたかのように伝えるのと、まったく違うのでございます。こちらのほうがずっと正確です。大声をあげてその関白の御殿で怒鳴り散らしたというのですから荒武者熊谷健在でございます。

「何と娑婆というのは情けない世界であるか。仏様の世界では上も下もないではないか。尊い

仏様のお話をしていいものだろうか」大声でわめいたのです。今日だってこんなことを尊い人の前で言うのは、少なからずはばかれるところです。熊谷はすこしも武士の心を失わないまま行者蓮生房になっているから、こういうこと少しも恐れずやってのけるのです。読んでこのほうがすがすがしい。信仰物語としてもこのほうが素晴らしい。こういうことを堂々と偉い人の前で言えないようでは、本当の武士の信仰ではない。モヤモヤと胸の中でだけつぶやいているのは、真実信仰としてもうそでございます。

さて、大声をあげたものですから、関白殿下にもそれが聞こえました。「何者が何のためにああいふふう騒いでいるのだ」と、お尋ねに

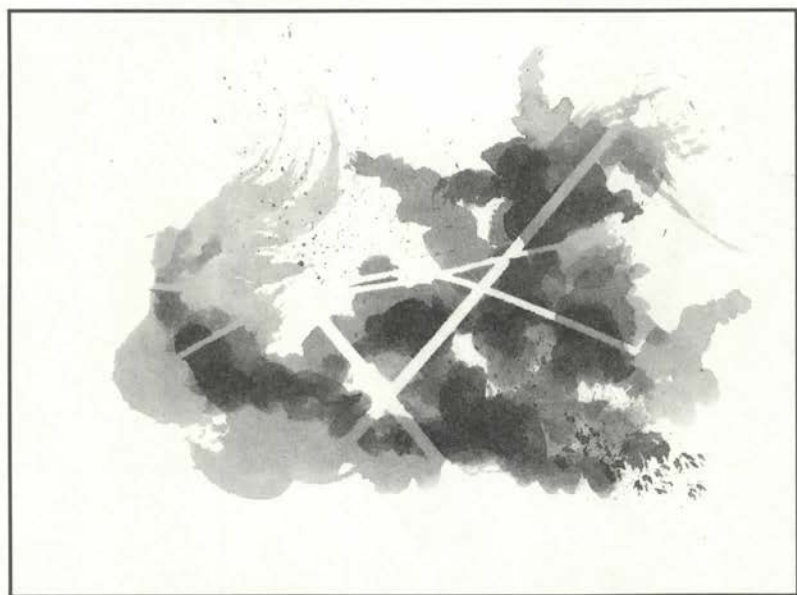
なつたそうでございます。そこで、法然様「これは蓮生房という者で、音に聞こえた乱暴者である。どこに行つてもわがままなのでこちらにお伺いするにあたつても、何かしてかしては困ると思つたけれども、連れていかないというとまた大事になるので、やむを得ずそのままにしておいたら、こういうことになって申しわけありませんでした」、そう言つて法然様はおわびしたそうでございます。九条関白という人は物のわかるお方でした。法に従う人というのは、道理のわかる人のことです。「それでは、その者もここに呼び入れて、一緒に法話を聞かせるように」。鶴の一声で熊谷は関白殿下のそばに伺い候することを許されたのでございます。

画面はこういうふうに説明しております。「人

間は確かに極楽往生を遂げれば仏様のおそばに往くことはできるのだらうけれども、しかし、それはこれからの末世でのことである。娑婆の世界において、何の資格もない庶民が関白殿下のそばに呼ばれて並んでお座りすることができるといふことは、前代未聞のことである。

それにつけても娑婆世界において念仏というものがどのようにあり難い効果なるものであるかといふことがこれでわかる」。すなわち、念仏行者でなければ、ありえない奇跡がここで起こつたのだといふ言い方をしております。ここもまた素晴らしい法然という方の人徳法力ですね。

さて、その次の熊谷物語がまた素晴らしい。入つて一緒にお話を聞いてもいいという許可がでたそう、みなさん、どうなつたと思います



か？ 我々だったら、まず上がっていいかどうか、モジモジするところですね。それから、側にいったら、さて、座ったものやら、立ったものやら、お辞儀はどうしたらいいものやら、これも目をキョロキョロさせるだけでしよう。私はみなさんのような立派な方の前に立つのでさえ、どうしようかと迷いましたが、講師ですのでもを得ずこういう席に立たせていただいているのですけれども、おひとりおひとりですと、とてもお側にも寄りつけないように思っているのでございます。これが関白殿下ですから大体は天皇様の前に立ったと同じです。恐れ多くて側にも寄りつけない。そういう場面でございます。ところが、熊谷は「入ってよろしい、来るように」と言われるなり、ズカズカと上がったと

いうのでございます。上がったと思うと、関白にお辞儀もしないでその隣にどつかと座ったというのです。そして、法然様のお話を身を乗り

出して聞いたというのでございます。傍若無人というのはこのことです。これは恐らく歴史的事実だと思えます。そしてこれが熊谷という人



なのです。

武士道がそのまま生きてるのでございます。

しかし、その武士道が傍若無人のままで、念仏世界の中に蓮生房熊谷信仰はきっちりおさめられていて、兼実公もそれをとがめだてすることがない。関白、法然、蓮生房。三人がまるで友だちのように殿下のお屋敷の一番奥の間で念仏の法輪に結び合わされているのでございます。

これは完全に娑婆極楽世界が実現した姿ですね。ここでは、武士道を否定しなければ念仏にならないということではない。武士道さながらに、武士道の純粹に徹することをおしてその底に門を開くのです。そして、さながらに極楽往生、地上極楽、此土浄土となったわけなのでございます。このところをそのまま絵にしまし

たら、まさしく此土浄土です。この世さながらに浄土となります。これが浄土というものなんです。こういうことが、武士道そのまま浄土に迎え入れられるという意味でございます。ここで熊谷がもし恐る恐る行ったとか、丁寧におじぎをして三歩下がったところに席をとったとかしてこうなったというのは、これは法然上人極楽往生にはなりません。善惡選ばずにならないからです。武士道唯我独尊。これが蓮生念仏です。それを無礼ととがめだてないのは関白此土浄土です。それを止揚して法然往生が成立します。この三位一体が念仏往生と武士道との本当の出会いということになってくるのでございます。

(つづく)

平成の「自然葬」

伊藤唯眞

（佛敎大學敎授
浄土宗総合研究所客員敎授）



写真 落合泰三

墓からの自由とは

このごろ世間で、葬送や祭祀の在りようを問いかける声が高まっている。伝統的な葬法や石塔による祭祀を見直そうとする動きが出ている。自分の死後の葬送を遺族に委ねるのではなく、生前にその方法などを明確にしておくのは、死

後の自己決定権であると主張する人びとも現れている。確かに、今、人びとの葬祭についての意識が変わりつつある。

その新しい動きの一つが、平成三年二月に結成された、安田睦彦氏主宰の「葬送の自由をすすめる会」である。安田氏は「自然葬」を提唱する。同氏は、焼骨を石塔に納置する従来の慣

行から脱することを「へ墓」からの自由」と標榜し、代わって焼骨を粉碎して山や海に撒く散骨をすすめ、この散骨に次のような葬送理念を付与して「自然葬」と名づけている。

「自然葬」とは、安田氏によれば「遺灰を山や海に還す葬法を、自然の摂理に従った地球環境にもやさしい葬法という意味」（「自然葬のすすめ」『へ墓』からの自由）社会評論社刊）だという。

また「葬送の自由をすすめる会」では、「遺体を自然の物質循環の中に還し、へ墓からの自由」を求める葬法」ともいい、敷衍して「散じられた骨灰が自然の物質循環の中に還り、自然を養うことを望みながら、遺灰を散じて故人を追悼する葬送形態」（宮田桂子「なぜへ自然葬」という言葉を使うのですか」『死んでもお墓に入りたくないあなたのための法律Q&A』社会評論社刊）を指すのだとも説明している。

遺骨を、散骨という形で自然界に還そうという提唱は、自然に還るといふ日本人の心性に訴えるところがあり、新しい発想の葬儀運動だとして大きな関心が寄せられた。「自然葬」は、火葬後の遺骨処理の在り方を問うものであり、散骨は当然石塔を必要としない。焼骨の処理は主として石塔への納置というのが慣習となっているが、これはそう古くからのことではなく、ことに「家」の墓が一般化するのとは近代以降であり、わが国でも散骨は古くよりあったから、墓への固定観念、慣習に束縛されることなく、自由な発想で葬送を見直さねばならないとするのが、「葬送の自由をすすめる会」の基本的な考え方である。

そして、葬送の方法、儀礼などの自由は憲法に保障されている、として梶山正三氏は散骨の合法性を主張するなかで、「死者を葬るのは、

故人を追悼し、その想いを表現することにはかからない。したがって、その方法は本来憲法三条で保障された個人の自由であり、それが宗教的儀式としてなされるときは憲法二〇条で保障された信教の自由にも係わり、さらにそれは社会的な表現形式の問題として憲法二一条で保障する表現の自由の問題でもある」（散骨の合法性）『葬送の自由』0号）と述べている。このような観点から、「葬送の自由をすすめる会」の会則でも、その「目的は、日本国憲法第一三條、第二〇條に規定されている個人の尊重、幸福追求の権利、信教の自由という基本的人権に基づき、地球環境の保全と調和する葬送のあり方を研究、実践し、啓蒙すること」と規定している。

平成三年十月五日、同会による初の「自然葬」が相模灘沖で実施され、同十五日公表、翌十六日マスコミが大きく報道、法務省、厚生省の見

解を伝えた。同日付の「朝日新聞」によれば、法務省刑事局は「刑法一九〇条の規定は社会的習俗としての宗教的な感情などを保護するのが目的だから、葬送のための祭祀で節度をもって行なわれる限り問題ない」との見解を示し、また厚生省生活衛生局企画課では墓地・埋葬法に関連して「同法は散骨のような葬送の方法については想定しておらず、法の対象外で禁じているわけではない」との立場を表明した。

このように法務省や厚生省が、節度ある限り容認されるとの態度をとったことから、社会の関心が一挙に高まった。それにつれ、「自然葬」運動に柔軟に対応しようとする自治体も現れた。川崎市の公園緑地審議会が平成五年二月四日、市営霊園の一角を散骨に開放する方向で検討するように答申を同市に出している。一方、ガードの堅いところもある。京都市営大日山墓地で

未使用の墓地を散骨に開放するよう、山本正博氏が平成五年八月に要望したところ、十一月八日付の回答は散骨スペースの設置については京都市共葬墓地条例、および墓理法上困難というものであった（『散骨を考える会会報』第8号）。

「自然」への納骨なのか

『葬送の自由をすすめる会』による「自然葬」の実施は、平成五年十一月現在で、十二回を数えている。会員数も二千名近くとなり、支部も関西、東北、九州、東海の四支部が結成されて、本年を迎えている。また関西でも京都市に、「葬送の自由をすすめる会」とは別個に、平成三年十二月に「散骨を考える会」が結成された。

この会は、日本人の死生・霊魂・葬送・祭祀などの観念がどのような宗教心情をつくり上げ、またどのような儀礼を形づくってきたか、さら

に、そのなかで「散骨」がいかなる位置を占め、日本人の間で古くして新しい葬送法として受容され、今後、都鄙に定着していけるか等々について勉強していこうとするものである。「散骨」をすすめる前に、「散骨」をめぐる諸問題をじっくりと考えようとするものである。三ヶ月に一度ほどの勉強会があり、会報は平成六年三月で九号を数えている。

この間、平成四年十月一日、同会世話人の山本正博氏が亡母の満中陰をすませて、舞鶴湾沖でその遺骨を撒かれた。なお、同会の会員のなかには散骨の実施を希望する声が強く、グループ「撒」が平成五年七月に結成されている。

このように、とくに平成三年秋以降各地で「散骨」に関心が強まったが、その背景には現代の葬祭事情が横たわっている。葬儀の形骸化や華美化によって、死者を真に悼み弔う心が不在に

なっていること、とくに都市部では墓地が入手難となり、建墓費が高騰していること、核家族化による血縁関係の変化があり、子女が少なくなり、墓や仏壇を継承して祀ってくれるのが難しくなってきたこと、近代化、都市化が人びとに意識変化を与え、葬送の運営主体も地縁社会から血縁、それも家族、個人本位に移ってきたこと、などなどの問題がその背景となっていた。

これらの問題は、その当否は別として、時に問題意識の強い人びとから、僧侶や葬儀社に対して批判が寄せられたり、また墓地開発業者の自然破壊行為に不快感をもたれたりする。このような葬祭についての批判や疑義、あるいは不安感などが「散骨」の受容を容易にしている。

葬式、墓の維持、法事など死者祭祀の諸行事に抵抗を表明する人も少なくない。家庭でのこれらの諸行事を実際に裏方として支えている女

性に抵抗感が強く、またこの類いの行事を支えている「家」制度そのものへの反感も大きい。現代の葬墓事情に、このような人びとはどんな悩みをもっているのだろうか。以下、少しその声を聞いてみたい。

——家の枠組に縛られた墓の在り方に強い疑問があり、なんとしても「〇〇家の墓」には入りたくない（夫の家であれ実家であれ）が、現実にはどうしたものか（女性、

『再生』8号声の欄）

——日本の墓というものに納得できないものを感じていた。長男に責任があるとか、知らない人の入っているお墓を拝んで祖先を敬うとか……墓は暗くてこわいなあ（女性、『葬送の自由』0号）

——最後の気がかりは、考えて、考えて、考えても方法のみつからない自分の死体の

処理です。主人の墓に入らないのはもちろんのことですが、兄の嫁さんの「うちの墓に帰って来たらいいよ」という言葉に甘えるのも、大変厚かましい気が致します(略)墓はいりません。頑張って生活した。だからこそ、死後、子供たちに手間をかけたくない。負担をかけたくない(女性、『散骨を考える会会報』第3号)

——独り暮らしで娘は他家へ嫁いている身。葬式や後々の諸問題で娘の心の負担になりにたくない気持ちから、お仏壇も昨年焼却致しました。戒名、お墓は不要とかねがね娘に言っておりますが、遺骨をどこへ託し、処分するかは話し合うまでに至っておりませんでした。散骨の方法があると知り、これこそ私の願っていた処理法だ! と明るい希望をもったのです(女性、同右会報第

4号)

右のような切実な悩み、問題に当面している人びとに、解決策の一つとして登場したのが「散骨」であった。

——親の死後墓の維持管理も怠り勝ちになり、私もほっとけになること必定です。このことを考えますと、私の骨は散骨によって自然に帰ることが望ましいと思います(男性、同右会報第7号)

——現在、墓地だけは買っております(略)私には後継者がいません。私は散骨することと決めました(略)敢えて自然葬を選ぶ者です(略)私にとって自然が一番安心できる場所であるということです。自然と共生、あるいは自然の中に溶け込んで行く道を最後は取りたいと思っています(男性、同右会報第9号)

しかし、散骨の実施は死者本人ではなく、遺

された周辺の生者である。いかに生前の意思が明確であり、たとえ遺言であつたにせよ、周囲の者にその気がなければ実現しない。生前から、死後を託すものとの間に、葬送に関する思想的共鳴がなくてはならない。森田宗一氏の言われるように「死者の自由を守るのは生者の責任」（『再生』第2号）であるが、そう言えるためには死者と生者が思想を共有していることが前提になる。散骨希望者には、

——私は自然への納骨と考えます。私にとつての葬儀とは遺族が遺骨を碎き投棄するために袋詰めする時です。あとは私の意思通り自然界へ納骨してもらいたいだけです。（略）たとえ予定通りにすべてが行なわれなくても、私は自分の意思通り行なわれるものとして死を迎えたいと思っております（男

性、『散骨を考える会会報』第4号）

との、熱き思いがある。この思いには思想に断絶のある生者をも動かさずにはおかenいものがあるが、葬儀は生者が行なうものである。

葬送と祭祀を見直す

「散骨」は平成になつて始めて行なわれるものではなく、古代にも実施されていた。文献では『万葉集』でも挽歌に、

秋津野を 人の懸くれば 朝、撒きし、君が
思ほえて 嘆きは止まず（一四〇五）

玉梓の 妹は珠かも あしびきの 清き山
辺に、撒けば散りぬる（一四一五）

玉梓の 妹は花かも あしびきの この山
かげに、撒けば失せぬる（一四一六）

大鳥の羽易の山に汝が恋ふる 妹は坐すと
人の云へば 石根さくみてなつみ来し 好

けくもぞ無き うつそみと念ひし妹が 灰、
にて坐せば (二二三)

などに出ている。

ただ歌詠からは、火葬の場と散骨の所とが同一かどうか、火葬と散骨との時間的経過がどのくらいかは明らかでないが、場所も時間もそう離れていないと思われる。

淳和上皇は散骨を指示したが、それは人は没すれば靈魂は天に帰るのに、墓があれば惡靈が寄り来たり、長い間には崇りをなすので碎骨し、山中に散布したほうがよいとの考えてあった。

また藤原行成の日記『権記』によれば、長和四年(一〇〇二)十月十六日産婦が亡くなったとき、翌日火葬にし、十八日には白川に骨粉を撒いたという。また寛弘八年(一〇一一)七月十一日、行成は、十六年前に没した亡母と同年五月九日に逝去した外祖父源保光の父娘とともに改葬(火

葬)し、翌十二日に灰塵を鴨川へ流している。その死亡から火葬までの間かなりの時間が経っている。火葬すれば翌日には散布していたことがわかる。これらは火葬に引き続いて散骨があるのだ、この場合、散骨はまさに骨灰の処理であった。とすれば葬送は火葬までであって、散骨にあったのではなかった。つまり、火葬の一部に散骨が含まれているのである。

この点、平成の散骨は、火葬と散骨の間に時間の幅がかなりある。「葬送の自由をすすめる会」が実施した散骨は、その機関誌『再生』によれば、長期間保管されていた焼骨を細かくして散じている。相模灘の外洋に撒いた第一回の散骨は火葬後約三十年間保管され、山ではじめて「自然葬」にされた遺骨は十三年前に焼骨とされたものであった。三ヶ月後(第七回自然葬)、一ヶ月半後(第八回)というように、火葬後散

骨までの期間が短い例もある。しかし火葬直後のケースはない。そのようなことなら、散骨はまさに火葬後の骨灰処理である。先の山本氏の亡母散骨は四十九日をすませた後、読経のうちに実施された（『散骨を考える会会報』第4号）

火葬と散骨との間に、ある期間があつてこそ散骨葬といえるのでなからうか。なぜなら散骨の際に、火葬のときと同じように、故人を弔う宗教的感情が自然と再出するから、散骨も葬と考えられる。また他面、散骨を遺骨の最終処理たる投棄だとすれば、これを葬送、つまり散骨葬といえるかどうか疑念が生じる。そもそも「葬」とは肉体を処理することであり、だからこそ土葬、火葬という名称がある。肉体なき遺骨、それも遺灰の散布では葬といひ難い。あまりにも字義にとらわれた見方で、実施する者の心が問題だとする反論も出よう。また、火葬のとき

と同様の宗教感情が発露するといつても、それは死を悼む感情よりも死者への追憶の念のほうがより強いのではないかとも思う。

火葬直後の散骨は確かに骨粉投棄の感が拭えない。さりとて火葬から散骨までの期間があまりにも長すぎると葬の觀念が薄くなった散骨になつてしまふ。そこで思う。散骨葬といえるためには、火葬と散骨の間にある程度の期間が必要のではなからうか。この期間は人によつて異なろうが、この期間こそ、すでに葬の段階を離れて祭祀のそれに至つていたのである。散骨までの間、安置してある遺骨には祭祀の心が寄せられてゐるはずである。

このことから、散骨の問題を論ずるときには祭祀をその視野に入れておかねばならないという重要な点が指摘できる。「自然葬」や散骨は火葬を前提とした焼骨の在り方を対象としたも

ので、葬式の形式や土葬その他については将来の検討事項に属するということが、それでは方法論、技術論に局限されすぎて、「葬」の体系のなかでの散骨の意義が見失われてしまうのではなかろうか。現代の散骨葬が提起した「葬」の体系を完結さすには、祭祀の問題を欠いてはならないことが示唆されている。肉体処理の火葬を第一次葬とすれば、散骨は祭祀を経た第二次葬と位置づけられよう。この祭祀もまた生者によるものである。

日本人は靈魂の祭祀を重視するから、死者本人が自分に対する祭祀を生前否定していても、遺族や周囲のものが散骨までの期間に祀ったり、また散骨後も祭祀を欠落させることができないであろう。そこで散骨を採る人は必ず祭祀について自己の意見を明確にしておく必要がある。散骨葬については、その形式、方法などを考え

るだけでなく、祭祀をも視野に入れて論議しなければならぬであろう。われわれは散骨をも入れた葬の体系を組み立ていくべきであり、それでこそ古代のそれではない、平成の散骨葬として意義を新たにすることが可能となる。

墓に入る自由もあれば、入らない自由もある。また散骨を拒む自由もあれば、これを採る自由もある。葬送習俗は一気には変わらない。しかしそれは揺らいできたように見受けられる。葬送が自由な選択の対象となってきたのだ。

「自然葬」なる散骨葬は葬法の選択肢の一つであるが、確かに従来の葬送・祭祀に風穴をあけつつある、とみる人は少なくない。「自然葬」が捲き起した風が仏教界に吹き込んでくるのは確実である。これを契機に葬送・祭祀の在るべき姿を考えることが、今、内外から要請されている。



●岡山の誕生寺で行なわれる練供養といひ会式というのは俗称で、正式には「円光大師御両親追恩二十五菩薩迎接練供養法会」と呼ぶそうです。練供養といえは、大和の当麻寺も有名ですが、この誕生寺のは第十五世通誉上人が元禄十三年に復活したと伝えられていますし、どちらが古いかは一概でないといわれます。いずれにせよ、上人のご両親の霊を盛大な儀式によって極楽浄土へ毎年迎え入れなければならないことは、鎮魂供養を必要とするということでは、それだけ二人が悲惨な最後を遂げられていたからだと、梅原猛氏は説かれます。梅原氏は、上人の母の秦氏も父の時国と同じ日に殺されたとする説を前提にされているわけで、かつて聖徳太子や柿本人麻呂の怨霊についての著書もある氏は、怨霊の力が強ければ強いほど盛大な祭りによって鎮魂されなければならないと申されます。折しも東京の五月、平将門の鎮魂祭ともいう神田明神の祭りも盛大に行なわれました。本年は旅のページでおなじみの夏牧吾氏に現地へ飛び、ルポをお願いしてみました。

●今でこそ神奈川県厚木市は大東京のベッドタウンとして発展しましたが、つい戦後の十年くらいまではなかなか田園風景の続く村落でありました。村道を越えれば、むこうには中津川、小鮎川と合流した相模川が流れている

辺りの小寺に祖父母が住んでいて、何かの機会に九人の孫が集まったりすると、川原へ遊びに出かける子供供らに明治初年生まれの祖母が、岐阜なまりの抜けない大声で、「今夜はライスにするだて」早く帰って来いと呼びかけます。生意気ざかりの孫の何人かが、「おばあさん、ライスはご飯のことだよ」とたしなめますが、祖母にとってそんなことはどうでもよかったのです。つまり、彼女はカレーライスをやるつもりだったのです。彼女にすれば、カレーもライスは同じハカランダ言葉なのですから。うどん粉がたっぶり入り、黄色いカレー粉はインドのターバンを巻いたコックを印刷した袋からとり出します。玉ねぎ、にんじん、馬鈴薯の具の多いどろりとしたカレーライスは、当世ふうのルウのものとはずいぶん違っていました。吉川英明さんの「消え行く言葉」を読みななら、なぜかしきりに五、六十年前の祖母の声が思い出されてなりません。

(編集チーフ・小川有順)

編集スタッフ

編集室

栗田順一
齋藤晃道
長谷川岱潤
太田正孝
村田洋一
石上俊教

●お詫び

四月号、六十頁上段七行目、仏壇を仏壇、ふろを、み旨の子らに訂正し、幕堂後章台下に誤ってお詫びいたします。また十一頁下段、「東海道念仏行脚」五日目の行程と依所は、清水・金谷・45・2キロメートル、静岡教区、専求院でした。訂正し、お詫びいたします。

●お願い

本誌「浄土」への投稿は随時受け付けております。ただし、採否に関しては編集部にご一任ください。また、原稿は原則として返却いたしませんので、必要の方は必ずコピーをお取りの上お送りください。なお、採用させていただいた方には規定の稿料を進呈いたします。そのほか、ご意見、ご希望がありましたらご遠慮なくお寄せください。特に締切日は設けておりません。

編集部

浄土 六十巻 六月号 頒価五百円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成六年 五月二十五日

発行 平成六年 六月一日

編集人 宮林昭彦

発行人 牧田諦亮

印刷所 株式会社文化カラー印刷

写真植字 文化フォトタイプ

〒一〇五 東京都港区芝公園四七四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三(三三七八)六九四七

FAX 〇三(三五七八)七〇三六



SAPPORO

私たちは味わい・ライフを追求します。

うまい、うまいで、カロリー半分。 自信作〈カロリー-half〉



サッポロ生ビール カロリー-half

飲酒は20歳をすぎから

●ご協力をお願い：自動販売機による酒類の販売は、午後11時から午前5時まで停止されています。

サッポロビール株式会社

LIFE TOGETHER



スピードおさえて、いい運転。シートベルトをしめましょう。

人間のやさしさをクルマに。

姿と、かたち。



これが、新しいセドリック

高級車を運ぶ最大の基準は、その姿とかたちである。
つくり手の強い意志が感じられる姿と、それを忠実に具現化した正統のフォルム。すなわち、かたちである。
まず、姿がいい。かたちがいい。新しいセドリックを見てほしい。

Cedric

日産のかたちを見てください。PHOTO: セドリックV30ツインカムターボ プロアム

主な装備 ● V6 3000cc (V6 ツインカムターボ・総排気量 2960cc) エンジン ● 最高出力 255PS/6000rpm (※ NET 値) ● 最大トルク 35.0kgm/3200rpm ● フルレンジ電子制御4速オートマチック(E-AT) (※ NET 値) とは、エンジンを車両に搭載した状態とほぼ同等条件下で測定したものです。日産自動車株式会社お客様相談室 ● 全国共通フリーダイヤル 0120-315-232 お近くのローレル販売会社へ。